

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12816

研究課題名(和文) 精神性の進歩に関する自然発生的説明の検証 フロイトのモーセ論が示す推論装置の射程

研究課題名(英文) on "progress of spirituality" -- based on language and inference apparatus

研究代表者

中村 靖子 (Nakamura, Yasuko)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70262483

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：三年間にわたり継続して研究会を開催し、進化心理学やルーマンの社会システム論に基づき、啓蒙主義時代に人間の精神活動は飛躍的な進歩を遂げたとするKarl Eiblのテキストを手がかりとして、「非-世界」の構築に言語や推論装置が果たした役割を確認しつつ、『精神性の進歩』について活発な議論を展開した。それらの成果を、公開セミナー、シンポジウム、学会誌の特集号企画、単行本の企画という形で発表しつつある。

研究成果の概要(英文)：Based on evolutionary psychology and Luhmann's social system theory, Karl Eibl's text which saw a significant change in the Enlightenment era in the history of western European thought as clues, we developed active discussions on "progress of spirituality", in addition to confirming the role that language and inference apparatus played in "non-world" construction. We are announcing the results of these achievements in the form of open seminars, symposiums, special issue planning of academic journals, and planning of books.

研究分野：人文学

キーワード：精神性の進歩 推論装置 啓蒙主義 神経科学的人文学

1. 研究開始当初の背景

フロイト最後の著作『モーセという男と一神教』(1939)を論じてのことである(D 'Œdipe à Moïse. Freud et la conscience juive, 1974)をめぐって 90 年代以降、相次いで論者が発表されたが、それらの議論は、数千年という人類史的規模の枠組みにおいて展開している。代表者は精神分析以前のフロイトの神経学的仕事に注目し、フロイト最初の単著『失語症の理解にむけて』(1891 年)を翻訳すると共に、これを、18 世紀ヨーロッパの言語起源論争以降の言語思想と、19 世紀の神経学の飛躍的な発展の結節点として位置づけた。これらを受けて、本研究はフロイトが人類史的な規模で論じた「記憶」をめぐって、「精神性の進歩」を鍵語として検証しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、フロイトが最晩年の著作『モーセという男と一神教』において展開した「精神性の進歩」を鍵語に、集合的記憶概念と身体記憶という双方向から検討し、フロイトのモーセ論に対しても、また現代における「精神性の進歩」とは何かという問いに対しても、新たな展望を得ることを目的としたものである。

3. 研究の方法

27 年度は、授業期間外を利用して、計 4 回(全日で 2 日連続が 3 回、全日で一日が 1 回、のべ 7 日間)にわたってカール・アイブルのテキストを手がかりとして読書会を開催した。このテキストは、初期啓蒙主事の時代から若きゲーテに至るまでに、小説というジャンルの成立、地域性に縛られない広範な読者層の獲得、教養市民層の出現などの社会的・文化的背景について考察したものである。アイブルは、現代的な生物学的、社会史的、社会論理的な手法を用いて、文学のポエジー性>Poetizität<、そして文学と文学に関わりがないようなものの相関関係という文学の二つの側面を結び付け、ポエジーを論じる。アイブルによればポエジーはここ 200 年から 250 年の間に大きな意味を得てきた。なぜなのか。二つの次元、ポエジーを産出可能にする生物学的次元と歴史学的次元を関連させ、ポエジーの成立を読み解く必要がある。その際、思想的枠組みとして援用されるのがルーマンの社会システム論である。西欧社会のシステムが大きく変動し形成し直されるなかで、人間の精神構造にも何らかの変様が生じたという可能性は否めない。ルーマンの社会システム論によれば、有機体は、環境により選択的にコントロールされ、また有機体が環境と選択的に関係することにより発展する。感覚>Sinn<は高度化する選択の中で生じる。選択を重ねる人間の行為は、別のようでもありうるという意識を常に伴うことになる。それはつまり体験される世界は、世界の一部にすぎないということだ。そこでアイブルは非

世界>Nichtwelt<という概念を導入する。非世界とはもう一つのもの、定義されぬもの、定められぬものである。ここから、改めて「ポエジーの成立」という事象が、歴史的現象として捉えられるのである。

前年度までの議論や到達点を受けて、28 年度も引き続き、二回(一度は三日連続、二度目は二日連続)、全日の研究会を開催した。会には院生など若手の研究者にも多く参加を呼びかけ、Karl Eibl の Entstehung der Poesie をテキストとしてこの内容に関する議論をベースとして、ルーマンのテキストや 18 世紀啓蒙主義で時代を画し、かつ当時、人間観、恋愛観、家族観、道徳観などの幅広い領域にわたって人々の精神面に絶大な影響を与えたと思われる文学作品(レッシングの諸作品、ゲーテの諸作品など)の再読・解説を試みつつ、議論を進めた。二回目には、同じく Eibl のテキストを議論の土台としつつ、18 世紀に整えられた礎が、二十世紀前半に至るまでの精神史において、いかに継承され、かつ、その過程に置いて変容を遂げたかについて議論した。また、今後の研究の進め方について、さまざまな可能性を検討しつつ、将来的には一冊の論集をまとめることを視野に、テーマ設定や、それまでの途中段階に置いて成果発表について話し合った。代表者、分担者はそれぞれの分野におけるジャーナルなどに研究成果を発表した。

29 年度も引き続き、8 月下旬と 3 月上旬に二日間ずつ、集中的に研究集会を行った。研究会には、院生を含め若手研究者の参加を呼びかけ、18 世紀以降の精神史を論じたテキスト群の読解を中心として、18 世紀における人間の思考能力、とりわけファンタジーを含む抽象的思考能力の飛躍的な展開について、さまざまな文学作品や文学理論を手がかりとして、進化心理学の理論を参照しつつ、議論を重ねた。これは、「精神性の進歩」を測る指標として、抽象思考能力とファンタジー構成能力に着目し、これらが統合した機序として「推論装置」を捉え、その精神史的展開を辿る試みであった。これらを踏まえ、分担者が主催する感情研究を中心に据えた別の研究会(8 月 30 - 9 月 1 日、3 月 27 - 29 日開催)に、メンバーと、上記の若手研究者らが参加し、心理学的構成主義の問題提起や、神経学的方法論を踏まえた問題提起について報告を行い、脳機能研究を中心とした実験心理学、臨床心理学などの研究者らと議論を展開した。とりわけ、認知と感情、身体症状という点に着目して、物語作成行為が生理状態に及ぼす影響と、その自覚がフィードバックされつつ精神状態に及ぼす影響について検討し、成果として発表した。

4. 研究成果

代表者、分担者らは、これまでの成果として、分担者の企画・主催する公開セミナーで報告を行い、歴史学などの他分野の研究者

らと議論した。

これらの議論を踏まえ、代表者、分担者、上記の若手研究者らを含む執筆群による特集号の企画「感情と歴史」に参加し、その準備を進めた。

これらのセミナーを通じた研究の交流により、神経学的心理学で提起された「予測的符号化の内的モデル」という仮説に触れ、これが、「精神性の進歩」を飛躍的に促したとフロイトのいう「推論装置」という発想に近いものであることが分かり、フロイトの思想を、最新の神経科学の方法論により裏付け、検証し直す手がかりを得ることができた。

また、この特集号とは別に、代表者と分担者、さらに歴史学を含む若手研究者らを含むメンバーで、論集を企画・構想し、着実にその準備を進めることができた。これらの成果を踏まえ、現在は、2018年度の全国学会においてシンポジウム「感情の創成一叙述行為とその効果一」を企画し申請中である。

さらに、代表者、分担者並びに、研究会に継続して参加してきた若手研究者らと共に論集『非在の場を拓く』を企画し、平成30年度研究成果公開促進費に申請し、採択された。これは2019年2月刊行予定である。

このように、これまで三年間の研究成果を、公開セミナー、シンポジウム、特集号企画、単行本という形で、当初の予定を上回るほどの成果を発表することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

中村靖子、「共感し推論し予測する機械ニュートン以後、フロイト、そしてそののち」、『名古屋大学人文学研究論集』、第1号、査読なし、2018、73-97.
doi/10.18999/jouhunu.1.73

Ohtsubo, Y., Matsunaga, M., Tanaka, H., Suzuki, K., Kobayashi, F., Shibata, E., Hori, R., Umemura, T., Ohira, H.: ostly apologies communicate conciliatory intention: an fMRI study on forgiveness in response to costly apologies, *Evolution and Human Behavior*, 39, 2018, 249-256.

中村靖子、「種としての人間のゆくさき—フロイト、ラマルク、レム—」、『名古屋大学文学部研究論集文学篇』63号、査読あり、2017、55-76.
doi/10.18999/joufll.63.55

大平英樹、「予測的符号化・内受容感覚・感情」、『エモーション・スタディーズ』第三巻第一号、査読あり、2017、2-12.
<https://doi.org/10.20797/ems.3.1.2>

大平英樹、「内受容感覚に基づく行動の制御」、『BRAIN and NERVE-神経研究の進歩』69(4)、査読あり、2017、383-395.

中村靖子、「フロイトの方法—観察と思弁のあいだで—」、『名古屋大学文学部研究論集文学篇』62号、査読あり、2016、83-105.
doi/10.18999/joufll.62.83

中村靖子、「テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像」、『日本独文学会研究叢書『チューリヒ劇場と文化の政治』、査読なし、2016、63-80.

Hans Michael Schlarb, Formen und Folgen vorenthaltener Anerkennung in "Effi Briest", 2016, 査読あり、『欧米文化研究』23号、2016、47-69.

Osumi, T., & Ohira, H.: Heart-rate deceleration predicting the determination of costly punishment: Implications for its involvement in cognitive effort expended in overriding selfinterest, *International Journal of Psychophysiology*, 109, 査読あり、2016、29-36.

大平英樹、「価値・予測・誤差—社会性を支える意志決定システム—」、『エモーション・スタディーズ』第二巻第一号、査読あり、2016、46-55.
http://jsre.wdc-jp.com/emotion/pdf/es02_1/2_46.pdf

[学会発表](計 5 件)
大平英樹、ポジティブ感情の神経生理的基盤、第76回日本公衆衛生学会総会(招待講演)、2017年。

中村靖子、種としての人間のゆくさき—フロイト、ラマルク、レム—、公開シンポジウム「人間と記憶」、名古屋大学、2017年1月21日。

Ohira, H.: Interoception and affective decision-making, 31st International Congress of Psychology. (国際学会) 2016年、7月27日、パシフィコ横浜。

Ohira, H.: Recent advances in understanding depression: multimodality approaches from the perspective of neuroimaging, epigenetics and machine learning, 31st International Congress of Psychology(国際学会), 2016年、7月28日、パシフィコ横浜。

中村靖子、テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像について、日本独文学会秋季研究発表会、2015年10月3日、鹿児島大学。

〔図書〕(計 1 件)

中村靖子編著『非在の場を拓く』春風社、2019
年2月刊行予定(平成30年度研究成果公開促進
費採択)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村靖子 (NAKAMURA, Yasuko)
名古屋大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：7 0 2 6 2 4 8 3

(2)研究分担者

大平英樹 (OHIRA, Hideki)
名古屋大学・大学院情報学研究科・教授
研究者番号：9 0 2 2 1 8 3 7

シュラルプ ハンス・ミヒャエル
(Hans Michael Schlarb)
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：0 0 5 8 5 5 6 5